

「紙芝居・共感の楽しさ素晴らしさ」

11月10日 酒井京子

紙芝居は、最近いろいろな所で話題になり、マスコミにも取り上げられています。しかし、そのほとんどは「昔懐かしい紙芝居」としての扱いです。

しかし、今、紙芝居は幼稚園・保育園・図書館・学校はもとより、書店・地域文庫・老人ホーム・病院などさまざまな場所で演じられ、いきいきとした運動が展開されています。日本独自の文化財である紙芝居には、どんな「力」があるのでしょうか？

1、独特のかたち

紙芝居は絵本と異なり、表に画・裏に文章が書かれています。そのバラバラの紙を紙芝居舞台に入れ、一枚一枚ぬきながらお話を進めていくという形式をもっています。そのために、演じ手が必要であり、演じ手は観客と向き合って文章を読み進めていきます。演じ手なくして紙芝居は成立しません。綴じられ・読者自身がページをめくりながらお話を楽しむ絵本とは、大きな違いがあります。

2、紙芝居の独自性

①**出ていき広がる**・・・紙芝居は舞台に入れることで、その作品の世界をくっきりと観客に見せることができます。そして演者や観客のいる場との違いを区別します。演者が紙芝居を一枚一枚ぬくことは、舞台の中にあつたお話の世界が観客のいる場に出されていくことでもあります。

この「ぬく」という紙芝居独特の行為の連続は、作品の世界が舞台の中だけにあるのではなく、観客のいる場所まで、広げ届けるという重要な役割を果たします。

②**集中とコミュニケーションによる共感**・・・舞台の中にある紙芝居が一枚ぬかれると、観客は新しく出てくる場面に集中します。ここでも舞台は大切な役割を果たします。舞台があることで次の場面への集中が強まるのです。また、読み終わった場面を舞台の裏側にさしこむことも、作品への集中を強めます。

また、裏に文章が書かれているので、演者は観客と向き合って紙芝居を演じます。悲しい場面は悲しい気持ちになって、嬉しい場面は嬉しそうに。大げさに演じなくても、演者は観客と自然にコミュニケーションを

とることになります。

その結果、作品が語っていることへの共感が生まれます。その共感作品世界が、観客のところへ広がっているのですから、演者と観客の間だけではなく、観客同士の間にも生まれます。

今まで述べてきた、①出て行き広がる ②集中とコミュニケーションから共感の世界を生み出す ということをしてすべて行うのは演者です。ですから演者がどのような作品を選び、どのように演じるかはとても重要です。

人と人との繋がり希薄な現代社会で、このような紙芝居の独自性は、もっと大切にされて良いのではないのでしょうか？ IT時代にあって、生身の人間が向き合うことのできる優れた文化材である紙芝居を、たくさん演じ共感の輪を広げて下さい。

3、戦前・戦中の紙芝居の簡単な歴史

- 1、1930年に東京の下町に街頭紙芝居として生まれる
- 2、1931年 街頭紙芝居屋さん東京に2000人
- 2、1938年 日本教育紙芝居協会設立 松永謙哉・青江舜次郎
今井よね・・・キリスト教紙芝居 高橋五山・・・幼稚園紙芝居
- 3、アジア・太平洋戦争激化
- 4、1943年 月平均発行部数 6万部
- 5、1945年 敗戦
- 6、街頭紙芝居の復活 紙芝居屋さん全国で2万人
- 7、民主紙芝居人集団設立(後の教育紙芝居研究会)

4、世界に広がる紙芝居

- ・ 海外での反響
- ・ 2001年「紙芝居文化の会」設立 本格的に海外への紙芝居普及に力を注ぐ。現在29カ国に会員がいる。